



『坂の上の雲』のまち松山

SHIBA Ryōtarō's historical novel "Clouds Above the Hill" ("Saka no Ue no Kumo") depicts the life and times of three eminent Matsuyama-born figures responsible for laying the groundwork for Japan in its modern form. Their legacies provide models for community development being advanced in the city today.

明治を駆け抜けた 松山生まれの3人

作家・司馬遼太郎氏の小説『坂の上の雲』は、明治期に活躍した松山市生まれの3人を主人公にした群像劇。また、その時代の日本人の姿を描いた歴史小説でもあります。主人公の正岡子規、秋山好古・真之兄弟は、高い志をもって激動の時代をひたむきに生きました。秋山兄弟は、松山藩下級武士の家に生まれたため、経済的には決して恵まれておらず、「学問をしたい」という強い思いを叶えるために軍人となったのです。成長した好古は、騎兵

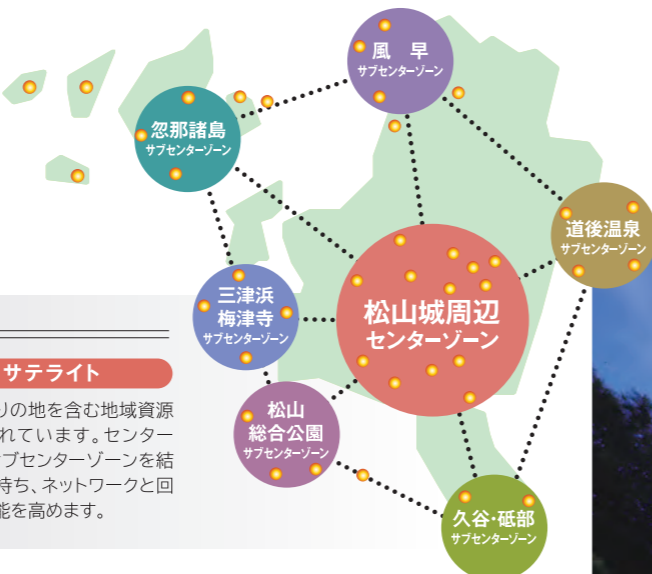
第一旅団長となり、日露戦争で活躍し「日本騎兵の父」と呼ばれました。また、晩年は郷里の私立北予中学校（現在の愛媛県立松山北高等学校）の校長になり、若者たちの教育に寄与しました。一方、弟の真之は、日露戦争の日本海海戦では作戦参謀として活躍しました。

青空にかがやく雲に 熱い志を感じながら

正岡子規を含めたこの3人は、それぞれ分野こそ違いますが、近代化へと歩む日本の礎となったことは間違いありません。そんな彼らの生き方や小説の世界観、そして明治時代の松山の様子を紹介するのが「坂の上の雲ミュージアム」。ここは司馬作品のファンを魅了するのはもちろん、「坂の上の雲」のまちづくりに取り組む松山市民の活動拠点にもなっています。そしてミュージアムの周辺には、秋山兄弟や子規、そして明治の松山を感じさせるスポットが点在。3人の生き方に思いを馳せながら、明治という時代を体感できます。

『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくり

松山市では、小説『坂の上の雲』の主人公3人が抱いた高い志とひたむきな努力、夢や希望をまちづくりに取り入れています。市内の各地に残る小説ゆかりの史跡や地域固有の資源を、行政と市民がともにみがき、活用し、一体になってまちを元気にしていこうと取り組んでいます。こうした地域資源が点在するまち全体を「屋根のない博物館」に見立て、回遊性の高い物語のあるまちを目指す「フィールドミュージアム構想」を展開しています。



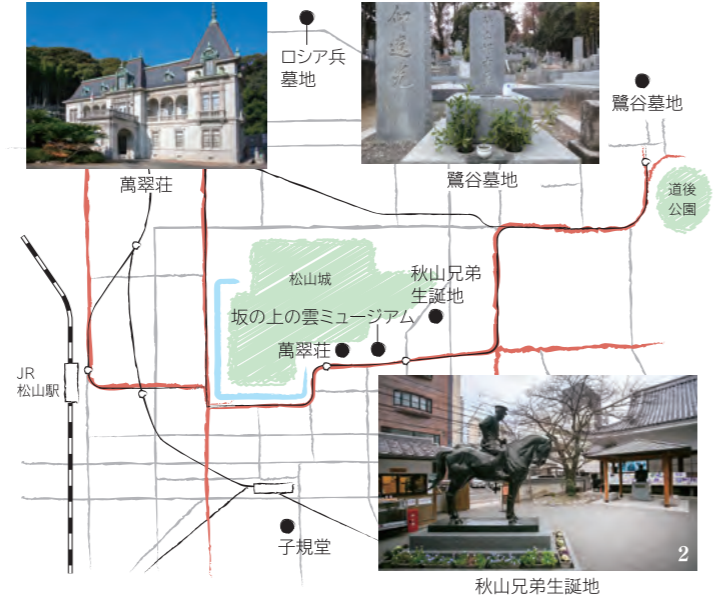
フィールドミュージアム構想

- センターゾーン**
中心市街地。交通と観光の拠点で、坂の上の雲ミュージアムを中心に、松山城、秋山兄弟生誕地、子規堂など、小説ゆかりの史跡・施設も多くあります。
- サブセンターゾーン**
道後温泉、松山総合公園、三津浜・梅津寺、久谷・砥部、風早、忍那諸島の6つの地域を設定し、固有の地域資源を活かしたまちづくりを進めています。
- サテライト**
小説ゆかりの地を含む地域資源で構成されています。センターゾーン、サブセンターゾーンを結び役割を持ち、ネットワークと回遊性の機能を高めます。



市民の手によって継承「日露友好」の証

日露戦争開戦中、松山市には全国初の捕虜収容所が完成し、延べ約6,000人のロシア兵が暮らしていました。松山市民は傷ついた兵士を手厚く看護し、また、捕虜の待遇も良かったため、ロシア兵が「マツヤマ!」と叫びながら投降したというエピソードもあるほどです。戦後、多くの兵士は故郷へと帰りましたが、松山で息を引き取った兵士は、ロシア兵墓地に葬られました。現在、墓地は市民の手で清掃され、毎年、慰霊祭が行われています。



秋山兄弟とは・・・兄の秋山好古は1859(安政6)年、弟の真之は1868(慶応4/明治元)年、松山藩の下級武士・秋山家に誕生。好古は大阪師範学校に学び、小学校教師となるが、その後、陸軍士官学校へと進み、陸軍軍人の道を歩み始める。日露戦争では騎兵第一旅団長として出征。「日本騎兵の父」と呼ばれている。真之は海軍兵学校へと進学。日露戦争の日本海海戦では作戦参謀としてロシアのバルチック艦隊を撃破。ともに日本の勝利に貢献した。

